

ラジオと地域情報メディアの今後に関する研究会(第9回会合) 議事要旨(案)**1 日時**

平成 22 年 6 月 7 日(月) 17 時 30 分～19 時 30 分

2 場所

総務省 8 階 第 1 特別会議室

3 出席者(敬称略)

(構成員)

上滝徹也(座長)、石井彰、伊藤恵、入江たのし、芝勝徳、西田善太、舟橋洋介、三浦佳子

(総務省)

内藤総務副大臣、小笠原総務審議官、山川情報流通行政局長、久保田審議官、武田情報流通行政局総務課長、大橋放送政策課長、田中放送技術課長、武居放送政策課企画官、荻原地域放送推進室技術企画官

(事務局)

情報流通行政局放送政策課

4 配布資料

資料 9-1 報告書素案

5 議事概要**(1) 開会****(2) 原案作成チームによる説明及び意見交換**

- 舟橋構成員より報告書素案(案)について、特に骨子から大きく加筆されたサービスコンセプトの部分に関し、説明が行われた。
- 上記を踏まえ意見交換を行った。主な発言は以下のとおり。
 - ・デジタルラジオとか V-Low 帯を使ったなど、色んなことが言われているので、ここで新しい言葉をひとつ作っておいた方がいいのではと思う。私たちがやろうとしていることは、テレビのデジタル化によって空いた周波数帯でデジタル技術を使って送受信する地域情報メディアという認識でよいか。
 - ・そのとおりと考える。
 - ・今までいろいろなデジタルラジオ像なり、あるいは V-Low 帯を使った技術のモデル、シミュレーションとかがなされてきており混乱すると思う。新しい概念をまとめ上げて言葉を作ってはどうか。
 - ・要するにもう少しブレイクダウンして、このメディアのワーディングをしないと

伝わらないということか。

- ・ラジオ局の方々が考えているデジタルラジオと本日プレゼンされた内容は相当違う。これの方が幅は広いので、デジタルラジオという言い方にも収まらないような気がする。
- ・現状では、誰と誰が事業的に組んで、訴求すべきキャンペーンの対象として名前を付けるというセットがまだ組めない。それが決まればやるべきことがはっきりするので、名前を付けてそれを表現することはできるけれども、とにかく今はパラメータが多すぎる。
- ・内実がなかなかまだ見えていないことや、あるいは不確定性が非常に大きいことは分かるが、それぞれがイメージする V-Low 像が違うから一旦まとめた方がいいのではないかということ。つまり、雑誌や新聞はこう変わるとかが言いやすい。そう言える二文字ないしは三文字くらいのもの。
- ・ラジオとお隣さんの第三極との化学反応によって、V-Low が単なるメディアという枠から殻を打ち破って、もっと大きなメディアを超えた何かへと発展していきたくて期待を寄せている。V-Low のセグメント利用目的イメージというのがあり、ここにこれから色々と参入事業者が出てくると思うが、その際の化学反応について、自然に参入した事業者が起こしていくのを待てばいいのか、あるいは化学反応をより起こさせるために何らかの工夫を施した方がいいのか。いずれと考えるか。
- ・触媒が必要かどうかということか。
- ・つまり、化学反応を全く意識せず参入枠をどんどん埋めていけば、化学反応が自然に起こるものなのか、あるいは触媒というものを考えておくべきものなのかということ。
- ・触媒というのは制度的なものということか。
- ・制度的なものかあるいは参入のときに何らかのつながりを意識したものを参入させるべきなのか。
- ・この報告書のねらいのひとつが正に触媒というか、そこにケミストリーがある概念。ケミストリー／化学反応の後に先程の V-Low の名称が決まるというように思っている。ただし、まだその段階に至っていないので、この報告書をもって触媒たらんとするねらいがある。これを土台に考える人が増えていくとそれが触媒となって機能して動くのではないのか。制度としては、どのような連携が取り込まれているかということが評価される仕組みをつくると、意味を持つ可能性が高い。
- ・行き着くところの化学反応により、いろいろなものが生まれてくる可能性があるわけで、あまり最初から枠をはめてコントロールしようとするとは逆に新たなものの誕生の芽を摘んでしまうかもしれない。
- ・そこは1か0のデジタルではなく、さじ加減かと思う。
- ・私見だが、V-Low のサービスは基本に音があり、そこに色んなものが入っていく音のコンビニみたいなものなので、自然な化学反応に期待したほうがよいかと思う。
- ・地元自治体の防災関連冊子を参照すると、ホームページのURL、あるいはQR

コードなどの記載が多く見られるが、逆にラジオとかテレビという文言はほとんど出てこない。もう少し社会的にうまいメディアミックスやバランスは何らかの形で考えられるべきと思う。災害時にネットだけで情報提供が全部できるとはとも思えない。ここまで極端にネットに偏らなくてもという気はする。

・おそらくメディアリテラシーの問題も関係してくるのではないか。

○ 舟橋構成員よりラジオ論のプラットフォーム機能のイメージについて説明が行われた。

○ 上記を踏まえ意見交換を行った。主な発言は以下のとおり。

- ・プラットフォームのイメージで放送事業者として一番気になる部分は、放送事業者が担うべき投資金額がいくらでプラットフォーム事業者がどこになるのかというところ。プラットフォームの事業者は全国共通一社で、そのハード利用に当たってソフト事業者が分担するというイメージになっていたと思うが、もし、どこの事業者も参入しなければ、結局放送事業者が負担することになることを懸念。プラットフォームの事業者の在り方についてもう少し踏み込んだ表現があり得るのか、あるいは次の会合への残課題となるのか。(傍聴者)
- ・恐らくプラットフォームとハード会社を混同しているように思うが、その上で、今の質問のポイントがよく汲み取れなかったところがある。
- ・つまり、ハード会社の部分が欠落していると読み取れ、実際誰が電波を送出し、設備投資を引き受けるのかという部分について、あまり書かれてないなというような印象。制度整備を願うとか、事業者が参入しやすい形を求めるとかというような表現ができるのかできないのか、あるいはそこまでは踏み込まないという表現になるのであれば、それはそれで研究会の結論と理解。(傍聴者)
- ・恐らく書き振りの問題と思われるのでそれについては検討するが、放送事業者の費用負担についても、各社内でももう少し検討はおねがいしたい。
- ・放送事業者には日々の経営で手一杯のところもあり、そういう事業者にとって、割と公平に全国いろいろな所で事業者が事業を続けることができるというようなガイドラインになりそうだということには希望があった。ただ、誰がやるのかという部分が書かれてないことに不安を抱くところも多いと思うので、制度整備や、ハード会社の運営について積極的な言葉が入るのかという点をお聞きしたかった。(傍聴者)
- ・むしろそうした点について、民放の方々がどのように考えておられるかがこれまで見えてこないなので、どういう意見をどのようにまとめられようとしているのかをお聞きしたい。
- ・多少余裕のある局は検討をしているが、日々の経営だけでも厳しいところはそのようなレベルにたどり着けないのが現状。ゆえに報告書に明記されることで反応が違ってくると思う。(傍聴者)
- ・研究会で具体化を進めていく中で、また関係者間の議論も進んできている。これがいろいろな意味での触媒になるが、その辺りのケミストリー／化学反応の触媒になると同時に関係者のだれがメインプレーヤーになるかの議論の触媒にもなっ

ている。その中で、国側も研究会での議論を切り口にその辺の問題点の解決を図っていただろうと思っているので見守っていただきたい。

- ・これまで民放とNHKの間の議論でハード会社として構築をしていかななくてはならない設備群の議論はあったと思われる。設備群の範囲については、恐らく基本的には送信に必要な設備群ということなので、プラットフォームの機能を提供するものは入っていないと推測。

一方で、委託放送会社に必要な設備については、サービスの提供形態によって必要な設備群が変わってくると思っている。オプションとあるのも、ある委託会社によっては必要だが他の委託会社によっては必要無く、そういうものまで整備が当然としてしまうと負担が大きくなるとの思いから。ただし、プラットフォーム機能の在り方の詳細までこの報告書は踏み込まないとしながらも、公的情報連携ASPの機能については必須としている。これは、音声放送の専有レーンでは、市町村ベースの細やかな情報提供をいわば条件として書いているからで、独自に提供が難しいラジオ局にも確実に提供してもらえよう、制度の中でしっかりとこのASP機能を提供していくことをうたっているもの。

700億円について、地方と都市部で分担をするような形のシミュレーションとした。一見安いと思われるかも知れないが積み上げればちゃんと700億。相当程度の既存ラジオ局が参入できる現実的な仕掛けになっていると思うので、各関係者でできることとできないことを検討いただいて、意見公募で打ち返していただけると生産的な議論が更に続けていけるのではないかと思う。

- ・ハードに関して、およそどれくらい費用が掛かるかまではお出ししたが、さらに具体的に制度のことなどいろいろ踏み込む場合、関係者の現実的な調整に話が及ぶ恐れがあるので、報告書ではこのレベルで止めてあるというところをご理解いただきたい。
- ・この研究会はそもそも新しいラジオメディアの在り方を模索していこうという目的のもと始まったが、具体化が進んでいくと、居心地のいいライブハウスというラジオ本来の持つ原点に立ち返ろうということと、デジタルの特性を踏まえた第三極というものを考えるということ、そして、その原点と第三極との融合、これが我々の求めてきた新しいラジオなのかなとおぼろ気ながら見えてきた。メインプレーヤーとなられる皆様は、積極的に参入に当たっての色々なビジネスモデル等について模索検討していただきたいと思います。

6 今後のスケジュール

- 第10回会合は、6月28日（月）に開催する。

以上